

とみや歴史散歩

其の一

今月号より、富谷に関する歴史や文化を連載で紹介します。

「富谷の地名の由来」 ～伝説から生まれた地名～

昔、熊谷に美しい長者の娘がいたそうで、その娘のところに紫太夫という若者が毎晩のように通って「私の嫁ごになってほしい」と口説いていたが、娘はいつも聞き流していた。毎晩のことに困り果てた娘は、修験者に占ってもらい「男のはかまに糸をつけて後を追いかけてみるが良い」と言われた。

娘は教わったとおりにはかまに糸を付け、翌朝その糸をたどって行くと、大きな木の穴の中に大蛇が眠っており、紫太夫は大蛇の化身だった。その日の夜も訪れた男に「熊谷の源内にある巨木の上のコウノトリの巣から、卵を持ってきてください」と娘が頼んでからは、紫太夫は娘のところには来なくなった。

とある日に、熊谷の巨木の近くに大蛇の破片が十の破片となって散らばっていた。大蛇は、卵が欲しくて卵を抱いていたコウノトリを襲おうとしたが、羽ばたきされてバラバラになってしまった。

人々は、大蛇の振る舞いを哀れみ、十の破片を一切れずつ埋めて、その所にお宮を建て丁寧祭った。この「十の宮」から、いつの頃からか富谷と呼ぶようになった。

このことについては、安永3年（1774年）に書かれた『安永風土記書出』にも記録が残っており、十の宮の一つが、山王の宮であったと記載されています。この山王の宮は、鳥居の上に三角の屋根のような形である山王鳥居のことで、現在の日吉神社のことを示しています。

日本全国には、数多くの地名の由来に関する昔話や伝説がありますが、しっかりとした記録が残っていないことが多くあります。そんな中で、富谷の地名の由来については、江戸時代の記録にも残り、大変貴重です。これからもこのお話は、残していくべきれっきとした地域の文化遺産だと思っています。

（執筆：富谷市民俗ギャラリー 学芸員 清水）



山王鳥居と
日吉神社の社殿

